

ダウン症の俳優 萌生^{ほうせい}

放送作家 鈴木 おさむ

好評を博したTBS系列のドラマ「生まれる。」の脚本を書かれた鈴木さんに寄稿していただきました。

ドラマ「生まれる。」を書くに当たり、高齢出産と言うテーマで描く以上、羊水検査とダウン症の子供が生まれるということ、この二つを避けるようにして物語を作ることが僕は嫌でした。

以前に僕が脚本を書いた「ハンサム★スーツ」という映画があります。その中にデブでブサイクでモテない主人公の親友で、車椅子の青年が出てきます。池内博之さんという役者さんに演じて貰ったのですが、自分の顔がブサイクで悩んでいる主人公に車椅子の友達 は明るく言います。「お前、ブサイク、俺、車椅子」と。

映画の公開後、その部分を批判する人も少なくはありませんでした。正直、その映画の中で、車椅子の友達が活躍するわけでもない。コメディ的場面で普通に出てきます。ネットなどにも沢山書かれました。「あそこで車椅子の友達を出す必要があったのか？」と。

必要ってなんでしょう??

必要がなきゃ車椅子の人をドラマや映画に出しちゃダメなのか?

その批判を受け止め落ち込む自分がいました。しかし、昨年、NHK教育テレビ（Eテレ）でやっている障害者による障害者の為のバラエティー番組、バリアフリーバラエティー「バリバラ」に出演させてもらうことが出来ました。そこで、司会もしている玉木さん。この方は脳性麻痺なのですが、玉木さんが、僕に会って言いました。「ハンサム★スーツは、おさむさんですか？」と。



ドラマの打ち上げ時の鈴木おさむさんと高井萌生くん

正直ドキッとしました。怒られるのか。・・・結論は逆でした。日本では障害を持った人達が出てくるドラマは、悲しかったりする話が多い。町を歩けば障害を持っている人にも沢山出会うのに、あまりにも、日本のドラマや映画は、障害者が普通に出演することがない・・・と。だから、コメディ役としてあややって車椅子の友達が出て来たことに、驚いたし、嬉しかったと言われました。この言葉は僕の中で大きな励みになりました。

そして、今回、「生まれる。」を書くにあたり、最初から決めていました。ダウン症の話 を必ず描く。そしてその時には、ダウン症の子供に「役者」として出てほしいと。しかも、出来れば、その子が出ているシーン自体は、なんか微笑ましくて、時には笑いも起きるようなシーンにしたいと。プロデューサーを始め、監督やスタッフも大賛成でした。

オーディションを行い、出会ったのです。高井萌生と。

オーディションの後、別日で面接のようなものを行いました。面接と言っても、萌生とお母さんと僕とプロデューサーとで話すだけ。萌生はドアを開けた時から笑っていました。そして、首から下げているTBSの入構証を手で引っ張り「ビヨンビヨ〜ン」と遊んでいました。そのキャラクターで笑わせてくれました。

僕がいくつか質問すると、萌生は時折、僕をからかうように「以上です」と勝手に話を切り上げたりします。1時間以上話したでしょうか？ とにかく萌生と話している時間は楽しかったんです。その時間、萌生も楽しんでいるような感じがしました。

この空気を出したい。雰囲気を出したい、と。だから、面接の時に出て来た萌生の言葉をいくつかピックアップして、それを台本の中に組み込みました。

そして撮影。出来あがった作品の中で、萌生は「役者」でした。ダウン症の子が、ダウン症の子供として、ただ出ている・・・のではなく、「俳優」だったのです。

お芝居をしていました。萌生自身が持つ楽しさを芝居の中でも出していました。あんなこと、なかなか普通の役者でも出来ません。萌生が出演しているシーンは、ほっこりして、

ほほえましいものになりました。

5話で萌生が活躍する回があったのですが、それ以降も、萌生には、その場面を楽しくして貰うために出て貰いました。

すごく評判も良かったです。

ドラマ最終回で、浩二という、将来、映画監督を目指している青年が、公園で遊んでいる萌生をカメラで撮影しながら言います。「将来、お前を主演に映画を撮りたい」と。

それは、ただ悲しく寂しい話ではなく、ダウン症の子だから出来るお芝居を120%使った物語。小さな恋のメロディー？ スタンドバイミー?? そんなお話が生まれたらいいなという僕の思いを込めました。

今回、この萌生の「がんばり」は沢山の人に笑顔を、希望と夢を、与えたと思っています。萌生、ありがとう。そして、これがきっかけで、変わって行きますように。